
ウィークポイント

プライア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィークポイント

【Nコード】

N3531H

【作者名】

プライア

【あらすじ】

非公式女子ボクサーの目崎文が新人つぶしと呼ばれるボクサー松原由子と対戦する。松原が「新人つぶし」と呼ばれる所以は、相手の弱点を短時間で見抜く洞察力と、その弱点を攻撃する正確さにあった。そして、松原は文のとあるポイントを集中攻撃する。文の弱点とは一体何なのか。そして、勝負の行方はいかに。いかんせんボクシング話ですので、暴力的な描写が苦手な方にはお薦め致しません。

「ヒロキ！今日の相手はどう？」

鳴浜高校3年の目崎文は裏ボクシングのリングの上にたっていた。彼女は裏ボクシングのボクサーである。

「今日の相手の松原由子は手ごわい。今までデビューしてから快勝を上げている新人ボクサーをことごとく倒している。

特にここ前2試合においてはTKO勝ちを決めている。」

セコンドは文の彼氏のヒロキがやっていた。ヒロキは初め文がボクシングをやることに対しては反対していた。しかし実際に文の試合を見てその姿に魅せられてついに自ら文のセコンドを勤めるまでに至ったのだ。「文！今日もがんばって！6連勝目指してるよ！」

「楽勝楽勝！なんだって文は期待のスーパースターよ！こんなところで負けない。」

文は余裕で美穂に返事を返した。文は現在5連勝中の期待の新人だ。どんなに顔や体に痣や傷をつくっても最後には必ず相手を倒す不屈のファイターとしてファンからの人気がとても高かった。それにビジュアルもいい。モデルみたいにスタイルもよく、目も大きくて、そして鼻が高かった。しかし最近はいあまりの勝ち続きにかなり天狗になっているところがあった。

「セコンドアウト！」

「じゃあがんばれよ、文！」

「文、ファイトお！」

「まあ、ちやっちゃと終わらしてくるよ。」

文は手をふりかざして答え、リングのはじめに立った。

「赤コーナー167センチ56キロ！！目崎文！！！」

ワッ

「目崎ー！！今日も根性で相手をぶっ倒せー！！！」

文の人気は相変わらずだ。男女問わずファンが大声を上げて文に声

援を送る。もはや文の人気はアイドル級だった。

「青コーナー166センチ57キロ〜！！松原由子〜！！」
ワッ

「松原ー！！新人つぶしの実力今日も見せてくれー！！」

相手、松原の人気もすごかった。文と同年でありながら、すでにこの世界に入って2年半。見かけはかわいい系だが、それ以上に何か引き付けられるベテランの風格のようなものがあつた。

（「新人つぶしか・・。文と同年なのに。」）

文は同じ年のその対戦相手の異名にその不気味さを感じていた。そしてロープにもたれて待機した。

カーン

第1Rのゴングがなつた。試合開始だ。2人とも一瞬で近づいて、接近戦の体制になった。文はフットワークを駆使してジャブジャブストレートの三段攻撃で松原を迎え撃つた。それに対し、松原はフック、ボディブローなど多彩に組み合わせて文を攻撃してきた。

（「くっ強い！」）

文は今までの相手とはレベルが違うことを感じていた。しかし松原も文に苦戦しているらしくその表情は苦しげだった。両者ほぼ互角のレベルで打ち合い、お互いに同等の傷を残しながら第1Rは終了。しかし若干文の方が有利に見えた。

「どうだった文？」

セコンドのヒロキが文に状態をたずねてきた。

「確かに相手は手ごわいね。でも新人つぶしって恐れられるほどじゃないね。」

文は少し余裕を見せ、タ力をくくっていた。しかし、ヒロキは少し気になることがあつた。

「相手をあなどらない方がいい。そう言ってこれまで奴に負けた新人は数知れない。松原が新人つぶしとしての実力を発揮しはじめるのは2Rからだと聞いている。松原は1R目で相手の弱点を見極め、2R目からそれを利用してじわじわと相手を倒すらしい。」

「マジで!？」

文の顔が驚きに変わる。しかし、その表情はすぐに戻った。自分は自分の試合をする。そしてその上で相手に勝つ。それに文は自分に弱点があるとも思っていないかった。

「大丈夫だよ、文に弱点なんかない。」

「そうだよ!がんばって文。いつものようにやればきっと楽勝だよ。」

美穂も文を後押しした。文はますます自分に自信をもった。いつものように相手を倒す。それだけだ。と改めて自分の中で認識した。

「気をつけるよ。」

「うん!まかせて!」

ヒロキの激励を受けると文はレフェリーからの呼び出しを聞き、試合に備えた。

カーン

第2Rがはじまると、文は前R以上に松原に攻め込みジャブジャブストレートの3段攻撃で迎え撃った。しかし松原は前Rと打って変わって戦法を変えて顔にガードを固めて時々ジャブを打ってくるだけになった。文の脳裏に不安がよぎった。

（「まさか、文の弱点を見つけたってこと・・・?」）

しかし、文はむしろ今この時こそポイントをかせぐチャンスだと思い、さらに攻撃を加速させた。ガードのないボディ部分にどんどんブローをぶちこんでいく。これには松原も苦しそうに顔を歪ませては嗚咽していた。文の中に先ほどの不安はふっとんでしまった。

（「何だ、いけそう!」）

そう思つて2 Rが残り10秒をきつた。文はすっかり自分のペース
と思い松原にボディブローをかましていく。と、文は見えてしまった。
ニヤツ

ガードの隙間から松原がかすかに笑いをこぼしていた。文は急にぞ
くつとなつた。その次の瞬間、

ズドーン

「ぎゃうっ!!」

文の鼻に衝撃が走つた。文は一瞬何が起こつたのか理解できなかった。
鼻にジンとくる痛み。松原は文の気のゆるみについてガードの
ゆるい文の顔面に右ストレートを打ち込んだのだ。

オオオオオオオオ

これには観客も湧き上がった。文の顔に、いやむしろ文の鼻にスト
レートを打ち込んだ。やられっ放しの松原だと思われていたがここ
で展開が分からなくなってきた。ここで第2 Rが終了した。

カーン

文は水にぬらしたタオルで軽くストレートを打ち込まれた鼻を冷や
していた、あまりにも正確に決まっていたので、さすがに少し痛か
つたのだ。

「文、どうだ？」

ヒロキが調子を聞いていた。文はまた余裕そうに答えた。

「大丈夫だよ。確かに最後のパンチは痛かったけど、それ以外で文
はポイントかせいでるんだから、あと4 R絶対勝てるよ。」

「だが、やはり彼女のことだからか、ヒロキの顔は不安そうだ。
ヒロキは言い返した。

「気をつけるよ。お前の鼻は高いからそれだけ狙われやすいし痛み

もデカイ。」

「大丈夫だつて。鼻にパンチを入れられることなんてよくあることだし、顔にガードを固めておけば平気！じゃあ行つて来るね。」

「文、気をつけてね。」

「うん大丈夫！」

そう言つて文はリングのはじで待機した。しかしなぜか美穂は心の中に何かモヤモヤした嫌な予感を感じずにはいらなかった。

カーン

第3R開始。文は顔にガードを固めジャブとストレートで攻める。

一方、松原はフットワークを使い、文の攻撃をかわしていく。さつきとは全く逆の戦法だった。

（「早い！」）

文は何とか間に合わせてジャブを打つ。しかし、まともに松原には当たらない。文にはムキになって一気にせめたてた。さっきまでの文のボクシングスタイルは崩れていた。

「おらあ！」

バスッ バスッ

その一瞬。松原の左と右のジャブが続けざまに文に打ち込まれた。そのジャブが入った箇所はさっきと同じ文の鼻だった。

「くそっ！」

文は一瞬ひるむが、すぐに立て直し松原にジャブを放つ。しかし、またほんの一瞬で放たれた松原のパンチが再び文の鼻をつらぬいていた。今度はさらに威力のある右ストレートだった。

「あぐっ！」

体が馴染んできた松原のパンチは加速していく。上体を揺らしながら、リズムの緩急をつけて左右のストレートを文に打ち込む。そしてそれはまた文の鼻を狙っていた。

「あがぁ！」

ッ

文の鼻から一筋の鼻血が垂れてきた。新人つぶしと言われているだけあって松原のパンチはジャブもストレートも威力がある。その威力あるパンチで百発百中、松原は文の鼻だけに狙いを定めてパンチを打ち込んでいくのだ。そう、文の高い鼻だ。容赦なく松原は文の鼻にピンポイントでジャブやストレートを打ち込んでいく。

ズドーン

「あうっ!!」

また1発文の鼻にストレートが打ち込まれた。鼻の高い文にとって、松原の鼻へのパンチはすさまじく激しい痛みを伴うものである。1発や2発だけならまだ大丈夫だが、何度も何度も打ち込まれるとそれだけ致命的なものになっていく。文は肉体的にも精神的にも疲弊していく。

（「ま、まさか、文の弱点って鼻・・・？」）

これだけ打ち込まればさすがに文もそう考えざるをえなかった。根元からポッキリと折れそうな痛みにはただ耐えることしかできないのである。文の鼻が折れないのはこれがボクシングだったからグローブのおかげでなんとかなっているのである。これがもしケン力で素手で勝負していたら、文の高い鼻は松原のジャブだけで折れていただろう。

バスッ

「くっ。」

文は今までこんなに連続で鼻にパンチを打ち込まれたことがなかった。なので、どう対処していいか分からなかった。1発の痛みがギリギリ続いている中にまた1発また1発と鼻にパンチを打ち込まれていく。鼻の感覚が少しずつ麻痺していく。

ズドーン

「あがっ・・・」

また1発文の鼻にストレートが打ち込まれた。文の鼻の両穴からますます血が垂れていく。文がジャブを打つが効かず、逆にまた鼻に

パンチを打ち込まれてしまう。

「文！顔のガードを固めろ！文！」

「おいおい！いつもの覇気はどうした目崎！」

ズドゥッ

「あぐうつ！」

「あー！」

「いやあ！」

セコンドのヒロキと観客の声が入り乱れる中、文はさらにストレートを鼻に打ち込まれた。美穂はそんな文を見るに耐えかねて、顔を伏せてしまった。

「く・くそつ・。。」

もはや文はほとんどガードをくずしていた。もはや時間もあまりない。松原はその隙について文の鼻に左ジャブを放った。それはきれいに2発文の鼻にうちこまれた。

バスッ バスッ

「あがつ、あがつ・・」

そしてその直後、休む間もなく放たれた松原の右ストレートが文の鼻をつらぬいた。3段攻撃は完璧に文の鼻にきまつた。

ズドゥッ

ブシュウウッ

「あがあああつー！」

文の鼻は破壊され、鼻血が一気に噴出した。今が試合中であるかを忘れていくかごとく文のうめき声はリング上に上がる。放射状に噴出していく文の鼻血は松原の白のトップスを紅く染めていく。

カーン

ここで3Rが終了した。しかし鼻の強烈な痛みで文はなかなか上手く歩けない。そんな文に余裕で松原は言い放った。

「アイドルボクサーだあ、ふざけやがって。次のラウンドでお前の

その高い鼻バキバキにしてやるよ。」

ニュートラルコーナーに戻った文は顔を見上げてまま目がうつろだった。鼻だけが痛々しく赤く腫れている。

「文、大丈夫か？」

ヒロキの声に何とか文は反応する。しかし、その返答はなんとも力がなかった。

「鼻が・・・痛い・・・」

「そりゃそうだ。鼻を20発も打ち込まれたらそうもなるだろ。鼻は大丈夫か？折れてないか？」

するとヒロキは文の鼻の頭を人差し指でツンと押した。すると・・・
「！！！」

文は自分の鼻に小さな鋭い痛みが走るのを感じた。鼻骨骨折といえるレベルの痛みではない。どうやら文は自慢の高鼻にひびを入れられてしまったようだ。これほどの屈辱を文は今まで感じたことがなかった。しかし、文はその痛みをあえて表情に出さずこらえた。

「どうだ文？」

「・・・大丈夫、なんともない。」

文は鼻の痛みをこらえ、平静につとめた。鼻をやられたままで文はこの試合を終われなかった。ここで文が痛そうな顔をする
と棄権させられてしまう。文は松原をボコボコにしなければ気がすまなかった。

ヒロキは文に水をかけた。ようやく文の意識が再びしっかりしてきた。

「あいつ絶対許さない！次こそリングに静めてやる。」

「気をつけるよ。あいつはお前の鼻を狙っている。じゃなきゃあんなに鼻ばかり狙わない。」

実際気をつけると言われてもどうにかできるようなパンチではない。

しかし、文はここでこれからタイミングを見計らってカウンターを打つことにした。

「じゃあ行つて来る！絶対勝つ！」

「文、ムリしないでね・・・。」

美穂の応援は少し弱気になっていた。さっきの文の姿を見せられたからだろうか。文が勝てないという気持ちで美穂にはよぎ

っていた。だからなおさら文は勝たなければならなかった。しかし、文は3R終了時に松原に言われたことが少し気になった。

カーン

第4R開始。直後に松原は瞬速で文の前に現れた。文はちょうど身構えようとしていたところだった。ガードが間に合わずいきなりジヤブを鼻に打ち込まれた。

バスッ

「あうっ！」

一瞬のことにみんなが驚いた。ひびを入れられているからであろうか、痛みは激しく、文の鼻から再び一筋の血が流れた。文は再び鼻の痛みがぶり返してきた。

「くそっ！こんな・・・やつに！」

文は何とか自分をふるい立たせて立ち向かう。しかし、そこにさらにジヤブとストレートが文の鼻に打ち込まれる。

バスッ　ズドォッ

「あがつ・・・。」

ドサッ

文はダウンした。この試合、双方合わせての初ダウンだった。

文の鼻からはますます多くの鼻血が流れていく。

「文！」

ヒロキは我を忘れて立ち上がってしまった。この時、ヒロキは文のセコンドではなく彼氏に戻ってしまっていた。もうこのまま倒れて

いてくれ。そう願った。しかし、文はカウント5で立ち上がった。

「まだ！負けてたまるか！」

そう言つて文は鼻血を手で拭き、全力で真正面から攻撃をかまえて向かつていった。しかし、また松原にジャブとストレートを打ち込まれてしまった。鼻血を拭いたばかりの鼻からまた鼻血が流れていく。

「あぐう・・・」

文の表情に力がなくなっていく。そしてさらに文の鼻に松原のストレートが入った。

ズドーン

「ああ・・・」

文は後ろに下がった。そして今のストレートを打ち込まれて全身の力が一気に抜けて、ガードが一気に下がった。文のガードはほとんどがら空き状態になり戦意喪失した。そして松原は容赦なく力をこめたストレートを文の鼻に打ち込み始めた。

ズドーン　ズドーン

「あがつ・・・うつぐうう・・・」

文はすっかり棒立ち状態。しかもロープ際にいるため倒れることもできない。そのうめき声は松原へのこれ以上ない応援歌となっていた。文の心は少しずつ折れていく。松原は左、右、左、右と交互に文の鼻にただストレートだけを打ち込んでいく。何度も何度も打ち込んでいく。

「あぐうっ・・・あやの・・・は・・・な・・・が・・・」

ズドーン　ズドーン

「あうううっ・・・はな・・・が・・・お・・・れ・・・る・・・」

ズドーン　ズドーン

「は・・・は・・・な・・・が・・・あ・・・」

文の鼻はもはやサンドバッグのように全力でストレートをうちこまれていく。文はもはや抵抗できない。どんどんどん打ち込まれていく。

そして・・・

バキィィッ

何発目のストレートだっただろうか。リング上に広がる大きな音を立ててとうとう文の鼻は折れてしまった。文は急に強まった痛みで自分の鼻が折れてしまったのを感じた。

「あぶううつ・・・」

ドバアアアッ

文の鼻が折れてしまったことを明示するかのように文の折れた鼻から鼻血が湧き上がってきた。それはなんともドス黒い色を

した鼻血だった。文は自慢であった高い鼻をへし折られ、そこから噴出していく大量の鼻血と崩れ落ちるようなうめき声でボクサーとして最悪に情けない顔へと変わり果ててしまった。文のプライドは粉々になった・・・鼻を折られてプライドが崩されたのだ。

ヒロキも美穂子も文の顔を見て顔が真っ青になり、思わず叫んでしまった。

「文、いやあああ！！！！」

「そんな文ああ！！」

ドクドクドクドクドク

「ふ・・・ふがあ・・・」

鼻血のせいで文はもはやまともに話せなかった。しかし松原はすでに折れて血でまみれている文の鼻にストレートを打ち込み続けた。

ズドーーッ　ズドーーッ

「は・・・はがあああ・・・」

鼻はどんどんつぶされていき文はより情けない顔になっていく。もはやさつきまでの復讐に燃える文の姿はなかった。もう誰も文が勝つとは思っていない。ヒロキは急いでタオルを投げた。

カンカンカンカンカーン

試合終了のゴングが鳴ると松原は文への攻撃をやめた。するとよう

やく松原のパンチから解放された文はロープをずるずると引きずりくの字型に倒れた。松原はそんな文の姿を見てニヤツと笑みを浮かべた。

「文！」

レフェリーが松原の勝利を告げると、ヒロキは文にかけよった。くの字型に倒れている文の顔を起こすとヒロキはさらに驚いた。

「ひどい・・・」

ヒロキの目に写ったのは何とも醜悪に破壊されてしまった文の鼻だった。もとの2倍くらい大きさへと真っ赤に腫れあがり、尖っていた鼻先も少しつぶれ丸くなってしまっている。よく通っていた鼻筋もぐんにやりと歪んでしまっていた。あの高かった文の鼻の見る影もなかった。ヒロキは文の鼻から湧き出て

くるドス黒い鼻血をタオルで抑えたがなかなか止まらない。やがて担架がやってきて文はそれに運ばれていった。そして目崎文、鼻骨骨折の報が試合会場に流れた。

文は松原に鼻をつぶされ、完全敗北した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3531h/>

ウィークポイント

2010年11月16日18時44分発行